



付 13 話 米国での留学へ出発 No.1

学位取得後、直ぐにアメリカに留学することになった。その年に結婚したこともあり、実はあまり乗り気ではない。向上心が強いわけでもなく、キャリアアップを目指すわけでもない。ここでも、他人が引いたレール上を走ることになる。自分でも情けないと思うが、性格だから仕方がないとあきらめる。アメリカ中西部のセントルイス、ワシントン大学に留学したが、トラブル続きで勉強どころではない。今振り返れば、良く帰れたと思う。今回は、研究の話は読者にはつまらないし、コンピュータに関してはちょっとだけ、後は留学珍道中の話である。

大学には毎年、半年から1年間、数人の海外留学制度があり、各学科持ち回りで教員が選ばれ、長期留学することになる。その年は、建築学科の順番で、M先生が強引に自分を押し込んだようだ。若かったのも、その辺の事情はほとんど分からない。最初のトラブルは、他学科からの留学の横取りである。確か、電気学科か機械学科の年寄りの教授だったと思う。次年度まで待てということであるが、M先生は曲がったことが大嫌い。断固反対、私には家で待機、大学には来るなという厳命であった。それほど乗り気ではなかったのも、「別に1年ぐらいいいじゃない」と思っていたが、仕事に行かなくてもいいなら、それもよし。家でぶらぶらしていると、老教授から電話があり、自宅に来て説得するという。別に怒っているわけではないので、大学にいくと告げた。出かけると、M先生の兄弟子にあたる名大のS教授が来ていて、M先生を説得していた。タジタジとしているM先生を初めて見た。攻撃的な人種は守勢に回ると弱いらしい。その後もゴタゴタしたが、結局、長期留学を辞退、代わりに、その年、期間を短くし留学、次年度も短期留学ということで決着した。M先生の粘り勝ち、ただ、私には留学中にアメリカで就職し、もう帰ってくるなといった。ハイと返事はしたものの、そのつもりは全くなかった。

留学先のワシントン大学 (Washington University in St. Louis) は、ネットの情報によれば、米国ミズーリ州セントルイスにある私立大学、1853年創立、7つの大学院と学部によって構成され、全米でトップレベルとされる教育機関のひとつ、全米大学ランキングでは常にトップ10にランクし、「中西部のハーバード」と親しまれている超難関校である。医療、社会福祉、都市・建築などの分野が有名で、特に医科大大学院はその業績において世界的な知名度を誇っており、数多くのノーベル賞受賞

者を輩出している。中規模な大学にもかかわらず、現在 22 人のノーベル賞受賞者が所属している。当時の私はそのことを全く理解しておらず、田舎の大学に留学するつもりでいた。留学先の P.L.Gould 先生は、原子力発電所クーリングタワーの研究でトップクラス、有名な教授である。K 先生もクーリングタワーの研究を行っており、その関係で以前 Gould 教授のところに留学していた。自身も K 先生の紹介で、Gould 教授の研究室に行くことになったわけである。

留学の準備を整え、ビザ取得で確か大阪の米国領事館に行ったと思う。長期滞在なので学生ビザが必要、大学からの招聘状を持参したが、なかなか理解してもらえず、ここでもトラブルとなった。面倒なやり取りが長く続いたが、漸く学生ビザを発行してもらった。パスポートを見ると、ビザの部分が白塗りのインク消しで書き換えられている。観光ビザと書き間違えたようだ。これを見たとき嫌な予感がした。

これまでのことをすっかり忘れ、成田より出立だ。初めての外国旅行、搭乗手続きを待つ。どこで聞きつけたか知らないが、清水建設の Y 氏が見送りに来た。「うれしかった」。不安と共に飛行機に乗り込む。航空会社は全く記憶にない。ただ、ハワイ経由、ロサンゼルス行きであった。ハワイで入国手続きを行う。悪い予感の中、ここでもトラブル。入国審査は、何もない比較的簡単で直ぐ終了する。しかし、パスポートを見せると直ぐに別の部屋に連れていかれた。根掘り葉掘り、いろんな質問をする。語学が拙いので適切に返答ができず、さらに怪しまれたのか、2 時間近く拘束された。最終的には、大阪の領事館に連絡をとり、了解が得られたらしい。漸く入国が認められ、解放された。一時は入国を拒否され、強制送還になるかと思った。悪いことをしたのではないので、恐怖があったわけではない。日本にトンボ帰り、それはそれで面白いと記憶している。

解放されて始めて飛行機が待っているか心配になった。空港の職員にせかさされ、向かった先に乗ってきた飛行機が待っていた。安堵と共に、乗り込むと、周囲から多くの鋭い視線が向けられるのを感じる。「こいつか、こんなに離陸を遅らせたのは」、と言っている声が聞こえるようだ。うつむいて席に向かうが、自分の席は隅に追いやられていた。

ロサンゼルスまでは、寝たふりをしよう。実際に寝てしまい、起きたときは全て忘れていた。着陸すると、直ぐに心配が襲ってきた。ロサンゼルスには知人の知り合いの家に 2, 3 日滞在する予定であったが、その知人の住所と電話番号以外、何も情報がない。無論、彼にあったこともない。何とかなると自分に言い聞かせ、タクシーに乗る。